

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦 2026年（令和8年）2月 20日

一般財団法人 櫻田 會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者名 野口 雅弘

大学名・職位 成蹊大学・教授

第43回（2024年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

資本主義と気候変動:ウェーバーとエコロジー

Capitalism, Climate Change, and the Weberian Perspective on Ecology

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

In this research project, I re-examined Max Weber's sociological theories within the context of capitalism and ecology. My study consists of two main parts.

First, I analyzed the ecological limits of Weber's "rationalization" thesis. Weber's understanding of early capitalist development was based on the assumption that capitalism grew by switching from wind and water to fossil fuels.

However, following Andreas Malm's *Fossil Capital*, I argue that the shift to coal was not just about efficiency. It was a strategic choice by capital to increase control over labor. This shows that Weber's theory depends heavily on "stock" energy sources.

To support this, I conducted fieldwork at a micro-hydropower plant in Obuse, Nagano. My findings suggest that we must move away from centralized systems, like nuclear power, toward autonomous, local energy production.

Second, I updated Weber's theory using modern social and political thought. At a symposium on Andreas Reckwitz and Hartmut Rosa, I explored social acceleration and the rise of "singularities." I discussed the gap between the fast pace of capitalism and the natural rhythms of the environment. I also examined

the tension between radical environmental movements and exclusionary far-right politics, a polarization emerging in the age of singularities.

In the future, I plan to further investigate why some conservative politicians oppose renewable energy while holding anti-migration views. Building on this study of Weber's social theories, my next challenge is to explore the limitations of contemporary political discourse.

※研究の目的・研究方法・意義（日本文 600 字以内）

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で、マックス・ウェーバーは、プロテスタンティズムの禁欲的なエートスと近代の資本主義的秩序の形成の連関に注目した。そして、資本主義的秩序は「おそらく将来も、化石化した燃料の最後の一片が燃えつきるまで」人びとを規定するだろうとの展望を示した。

資本主義はたんに経済だけの問題ではない。資本主義と人間の思考・生き方を総合的に把握しようとした点で、ウェーバーの社会理論は依然として魅力的である。資本主義と気候変動を政治理論的に考察しようとするとき、今日でも彼の議論は参考になる。しかしながら、彼の理論の範囲内で、気候変動について考察することには限界がある。

研究助成を受けて、申請者が取り組んだのは、主として2つの課題である。

第一の課題は、ウェーバーの時代的・思想的前提を明らかにすることである。彼はエコロジー的な問題に気づきつつも、この問題に取り組むことはなかった。それはいかなる時代的・思想的な制約によるものなのかが、ここでの問いである。

第二の課題は、現代の社会理論や環境史研究をリサーチし、その成果を取り入れながら、ウェーバーの政治理論をエコロジー的な課題に応答できるようにバージョン・アップすることである。こうした問題意識のもと、申請者はアンドレアス・レクヴィッツ、ハルトムート・ローザ、ヨアヒム・ラートカウラの著作の研究に取り組んだ。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

【第一の課題】

本研究の第一の課題は、ウェーバーが前提としていたエコロジーに関する思想的な前提を問い直すことであった。よく知られているように、ウェーバーの理論は合理化・合理性をキーワードとしていた。このとき風力・水力などの自然エネルギーを石炭などの化石燃料に置き換えることは、ある意味では合理的であるように見える。ウェーバーが論じる初期の資本主義的経営は、まさにこうした化石燃料を使った蒸気機関を基礎にして発展した。

しかし、アンドレアス・マルム『化石資本——蒸気パワーの勃興と地球温暖化のルーツ』によると、化石燃料はエネルギー効率や価格の点で、自然エネルギーよりも優れていたわけではなかった。化石燃料への転換は、むしろ労働者への支配を強化するための資本の戦略的選択であったという。こうした視角からすると、ウェーバーの合理性は化石燃料という特定のストック型エネルギーに依存した、かなり限定的な前提の上に成立していたといえる。本研究を通じて、ウェーバーの合理化論は、石炭エネルギーへの移行を自明の進歩とみなす環境史的限界を持っていることが明らかになった。

【フィールドワーク】

第一の課題との関連で、申請者は長野県小布施町でフィールドワークをし、オーストリアのGUGLER社製のタービンを備えた小水力発電施設を見学した。驚くほど小さな施設であるが、一つのタービンで年間約 360 世帯分もの電力を供給できるという。原発再稼働に向けた硬直した議論の背景には、自然の「フロー」がもつ潜在力が十分に評価されてこなかったことがある。石炭・石油・核燃料といった「ストック」に依拠する中央集権的なエネルギー体制から、水・風・太陽といった「フロー」を基盤とする分散的で自律性の高い社会への転換が模索される必要がある。

【第二の課題】

ウェーバーの理論を現代の社会理論・政治理論によって補強するというのが、第二の課題であった。ちょうどよいタイミングで、「社会研究所と批判理論の 100 年」をテーマとした、社会思想史学会の連続シンポジウムの一つ「レクヴィッツとローザへの展開」で報告する機会を得た。

この報告では、ハルトムート・ローザ『加速化する社会』とアンドレアス・レクヴィッツ『独自性の社会』の研究史上の意義を、ウェーバーの理論との比較において検討した。資本主義における時間の効率化・テンポの上昇と自然の循環速度の乖離がますます大きくなっていること、そしてシンギュラリティーズ(独自性)が重視される社会で、移民を排斥する極右とラディカルな環境運動の対立・分極化が深刻化になっていることなどについて、ウェーバーと関連づけて考察した。ヴァルター・ベンヤミンの「緊急ブレーキ」のメタファーを今日の気候変動の問題とからめて、パネラーたちと議論する機会を持てたことも収穫であった。

この報告の内容については、少し時間がかかるかもしれないが、何らかの形で活字にして発表したいと考えている。

【今後の課題】

近年の保守系の政治家の思考においては、しばしば移民排斥などの排外主義的な傾向と、再生可能エネルギーへの消極的な姿勢が共存している。アメリカのドナルド・トランプ大統領も移民規制を強化するとともに、「Drill, Baby, Drill」(掘って掘って掘りまくれ)と繰り返している。今後は、ウェーバーとエコロジーをめぐる研究を継続するとともに、こうした現代の保守的な思考にも考察の対象を拡大していきたい。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

【論文】

「新自由主義以後の官僚制とデモクラシー」『年報政治学』2025-I号、3-14頁。

【新聞】

「(各自核論)二つの政治概念と少数与党政権」『北海道新聞』2025年8月29日

【学会発表】

「ウェーバーとの比較:ローザとレクヴィッツ(「社会研究所と批判理論の 100 年(3)——レクヴィッツとローザへの展開」)」社会思想史学会、2025年10月19日、青山学院大学(相模原)

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。